

地域に対する愛着形成の心理過程の検討

引地 博之¹・青木 俊明²

¹ 学生員 東北工業大学大学院 工学研究科 土木工学専攻 (〒982-8577 宮城県仙台市太白区八木山香澄町35番1号, E-mail:hhikichi@tohtech.ac.jp)

² 正会員 博(情) 東北工業大学 建設システム工学科 (〒982-8577 宮城県仙台市太白区八木山香澄町35番1号, E-mail:shunmei@tohtech.ac.jp)

近年、災害時における住民同士の救助活動や公共事業への市民参加など、住民の地域社会に対する協力的な行動が求められている。本研究では、地域への愛着が住民の協力行動を促す効果を持つことに着目し、社会心理学の知見を援用して愛着形成の心理過程を検討した。その結果、地域への愛着は、地域への肯定的な印象から形成されることが分かった。この地域への肯定的な印象は「土地への肯定的な印象」「集団への肯定的な印象」「文化への肯定的な印象」に分けることができ、この中で「集団への肯定的な印象」が愛着形成に大きな影響を与えていることが認められた。また、居住年数は愛着形成に大きな影響を与えず、居住年数よりも「集団に対する肯定的な印象」の方が地域への愛着形成に大きな影響を与えていることが認められた。

キーワード: 都市計画, 地域愛着, 意識調査分析

1. はじめに

災害時における被害の縮小や公共事業の円滑な進行は都市計画の大きな課題である。これらを達成するためには、災害時における住民同士の救助活動や市民のまちづくりへの参加など、市民が地域集団に対して協力的な態度を形成し、行動を起こすことが必要となる。

これに対して、若林ら¹⁾は地域への愛着が市民の地域活動への参加意向を高め、災害時における住民同士の連携の必要性を認識させる効果を持つことを示している。このことから、地域への愛着が地域集団に対する市民の協力的な態度の形成を促す効果を持つと考えられる。

今後、我が国では大規模な地震の発生が予測され、また、市民参加型まちづくりの必要性も高まる。そのため、コミュニティの強化を図り、これらに備える必要がある。しかし、現状は少子高齢化社会がさらに進展し、人口の減少によるコミュニティの弱体化が予想されている。そのため、市民の地域集団に対する協力的な行動を導く手法の開発がより一層、求められる。従って、市民の地域への愛着の形成過程を検討することは社会的に意義があると考えられる。

地域への愛着形成に関する既存研究では、Brown et al²⁾は周辺の環境や近隣住民とのふれあいが愛着形成を促すと述べている。また、榎野³⁾らは居住地に関する情報の提供が愛着形成に寄与することを示している。しかし、愛着形成の心理過程に着目して研究を行ったものは見られない。そこで、本研究では、地域に対する愛着形成の心理過程を検討し、その促進策を探ることを目的とする。

2. 仮説

(1) 地域に対する愛着の定義

環境心理学では、地域への愛着に関する研究が多く行われている。その中で、Hidalgo et al⁴⁾は既存研究を概観した上で、地域に対する愛着は一般的に「人々と特定の地域との間の情緒的な絆や繋がり」と定義されると述べている。本研究においても、上記にならない「地域への愛着」を定義する。

(2) 「地域」の範囲の定義

第1章で述べたように、Brown et al³⁾は周辺の環境や近隣住民とのふれあいが愛着形成を促進させると述べている。本研究ではこれを受けて、人々が愛着を形成する「地域」を一定の人付き合いを持つ、日常生活の活動を行う生活行動圏と考える。従って、地域を行政区域に関わらず、「普段、一定の人間関係があるような、居住地を中心とする生活行動圏」と定義する。

(3) 仮説

社会心理学における古典的印象形成研究では、対人認知過程において、ある人物に対する印象は当該人物に関する複数の情報をもとに形成されると言われている⁵⁾。

人々は日常生活の中での、近所の人々との交流、地域特有の文化とのふれあいなど経験から、地域のさまざまな面を認知すると考えられる。そのため、対人認知過程と同様に、地域に対する印象形成過程においても人々は

地域に関する複数の認知をもとに地域全体の印象を形成すると考えられる。従って、日常生活における「きれいな景色がある」「街並みに歴史を感じる」「地域の人々は誠実である」などの地域に関する肯定的な認知は、地域に対する肯定的な印象を形成すると考えられる。以下に仮説を示す。

仮説1 「景色が美しい」「地域の人々は誠実」などの地域に対する肯定的な認知は地域に対する肯定的な印象を形成する。

次に、人は肯定的な印象を持つ対象に、好意的な感情を抱くと考えられる。そのため、地域に対して肯定的な印象を持つ場合、その個人は地域に対して好意的な感情を形成し、情緒的なつながりを形成すると考えられることから、地域に対する肯定的な印象は地域への愛着を形成すると考える。従って、以下の仮説を検討する。

仮説2 「地域に対する肯定的な印象」は「地域への愛着」を形成する。

地域に対する認知は、「景色」や「街並み」などの土地の外観に関することから、「地域の人々の人柄」、「地域に残る伝統的な習慣」などの多岐に渡ると考えられる。本研究では、KJ法を用いて「地域に対する認知」について考え出された意見をまとめた。その結果、「地域に対する認知」は「土地に対する認知」「集団に対する認知」「文化に対する認知」の3つのグループに分類することができた(表 1)。

本研究では、人々は地域に関する複数の認知から地域の印象を形成すると考える。そのため、「土地に対する認知」「集団に対する認知」「文化に対する認知」はそれぞれ「土地に対する印象」「地域集団に対する印象」「文化に対する印象」を形成し、これらの印象は地域への愛着を形成すると考えられる。従って、以下の仮説を検討する。

仮説3 「地域に対する認知」は「土地に対する印象」「集団に対する印象」「文化に対する印象」に分類される。

既存研究では、地域への愛着の形成要因として居住年数の長さを挙げている³⁾。居住年数の長さが地域への愛着形成に寄与する大きな要因は2つあると考えられる。

1つは、純粋な「時間の経過」である。この場合、「時間の経過」のみが愛着の形成要因となる。次に、居住年数が長くなるに伴い、人々が祭りへの参加や住民とのふ

表-1 質問項目と係数

	理解数	質問項目	係数
土地に対する ポジティブな認知	景色の美しさ	この地域は美しい街並みや自然がある。 この地域の風景や街並みが美しい。	.84
	歴史的風景	この地域の街並みから歴史が感じられる。 この地域は歴史を感じる風景がある。	.78
	特産物	この地域には、多くの人に勧められる特産物がある。 この地域には、他地域の人々に勧められる特産物や名産品がある。	.83
	知名度	この地域はテレビや雑誌などでしばしば紹介される。 この地域は全国的にも有名である。	.83
地域集団に対する ポジティブな認知	人々の誠実さ	この地域の人々は誠実である。 この地域は誠実な人が多い。	.80
	交流の多さ	日頃、地域の人々と一緒に過ごす機会が多い。 日頃、地域の人々とよく話をする。	.80
	行政の親しみ	地元の行政は住民のために力を使っている。 地元の行政は住民のことを十分に考えている。	.77
地域文化に対する ポジティブな認知	祭り・イベント	毎年楽しみにしているお祭りやイベントがある。 お祭りや運動会など、多くの人で楽しむイベントがある。	.72
	伝統的習慣	生活の中で伝統的習慣が生き残っている。 この地域には、伝統的な生活習慣が残っている。	.79
	地域への愛着	この地域に対して愛着がある。 この地域に対して親しみを感ずる。 近所の人々に対して愛着がある。 地域の伝統文化に対して親しみを感ずる。	.87

れあいなど、地域との関わりを持つ機会が多くなり、それによって愛着が形成される場合である。この場合は、人々が地域との関わりを通して地域の特性を認知し、印象を形成し、愛着を形成すると考えられる。すなわち、「地域に対する印象」が愛着形成の要因となる。通常、人々はある対象に関して、単純に「時間の経過」を経験した場合よりも、肯定的な体験をした場合の方がその対象に情緒的な愛着を形成しやすいと考えられる。従って、居住年数の長さや地域に対する印象経由の愛着形成を比べた場合、強い効果を持つのは後者であると考えられる。従って、以下の仮説を導く。

仮説4 地域に対する印象は、居住年数よりも地域への愛着形成に大きな影響を与える。

3. 方法

市民の地域への愛着形成の心理過程を探るために質問紙調査を郵送配布・郵送回収にて行った。調査対象者は全国16市町の選挙人名簿から有権者3000名を等間隔無作為抽出法により抽出した。調査対象地域は北海道札幌市豊平区、北海道余市郡余市町、山形県山形市、山形県東村山郡山辺町、宮城県仙台市宮城野区、宮城県柴田郡大河原町、東京都目黒区、東京都武蔵野市、大阪府大阪市東区、大阪府大阪市東淀川区、広島県広島市安佐南区、広島県安芸郡熊野町、香川県高松市、香川県綾歌郡宇多津町、沖縄県那覇市、沖縄県北谷町である。有効回答者数は649名(男性323名、女性318名、不明8名、男女比50.4:49.6)、回収率27.1%、回答者の平均年齢は53.82歳(S.D.=15.67)、平均居住年数は26.1年(S.D.=18.3)であった。回答者に性別や年齢、居住年数による大きな偏りはなかった。

調査票では「地域」について、行政区域ではなく、日頃、買い物をする場所や職場なども含めた生活行動圏を想定し

てもらうよう教示した上で、質問に回答してもらった。質問項目は「この地域の風景や街並みは美しい」「この地域に対して愛着がある」など地域に関する肯定的な認知や地域に対する愛着を尋ねるものとした。これらの質問項目は6件法で回答を求めた。質問項目を表1に示す。

4. 結果

(1)各理論変数の係数の確認

理論変数として「景色の美しさ」「歴史的風景」「特産物」「知名度」「行政の評価」「人々の誠実さ」「交流の多さ」「祭り・イベント」「伝統的習慣」「地域への愛着」の計10個を設定した。これらの係数は.72以上であるため、各理論変数は心理的概念を測定する尺度として一定の妥当性を持つと考え、分析を進める(表1)。

(2)地域への愛着形成の心理過程

地域への愛着形成の心理過程を検討するために共分散構造分析を行った。まず、それぞれの「地域に対する肯定的な認知」から「地域に対する肯定的な印象」という1つの潜在変数を導き、その潜在変数が地域への愛着を形成するモデルを作成した(図-1)。「地域に対する肯定的な印象」を観測変数ではなく潜在変数とした理由は、ある対象の「印象」はそれに関する複数の認知の総体として形成されるからである。分析の結果は、「地域に対する肯定的な印象」からそれぞれの「地域に対する肯定的な認知」へのパス係数が全て有意であった。そのため、地域に対する肯定的な認知は地域に対する肯定的な印象を形成すると言える。また、「地域に対する肯定的な印象」から「地域への愛着」へのパス係数も.75であった。地域に対する肯定的な印象は地域への愛着を形成することが分かる。以上から、仮説1と仮説2は支持されているが、このモデルの適合度は良好ではなく(乖離度²=683.91, $p < .001$, GFI=.809, AGFI=.714, CFI=.792, RMSEA=.150, AIC=727.91),モデル構造の検討を要する結果となった。

次に、KJ法により分類された3つのグループを用いて「地域に対する肯定的な認知」が3つの「地域に対する肯定的な印象」を潜在変数として形成するモデルを作成した。すなわち、「景色の美しさ」「歴史的風景」「特産物」「知名度」の4つの認知が「土地に対する印象」を形成し、「行政評価」「人々の誠実さ」「交流の多さ」の3つの認知が「集団に対する印象」を形成し、「イベント・祭り」「伝統的習慣」の2つの認知が「文化に対する印象」を形成するモデルを作成した(乖離度²=353.82, $p < .001$, GFI=.910, AGFI=.854, CFI=.898, RMSEA=.109, AIC=403.82)。本研究では便宜上、このモデル

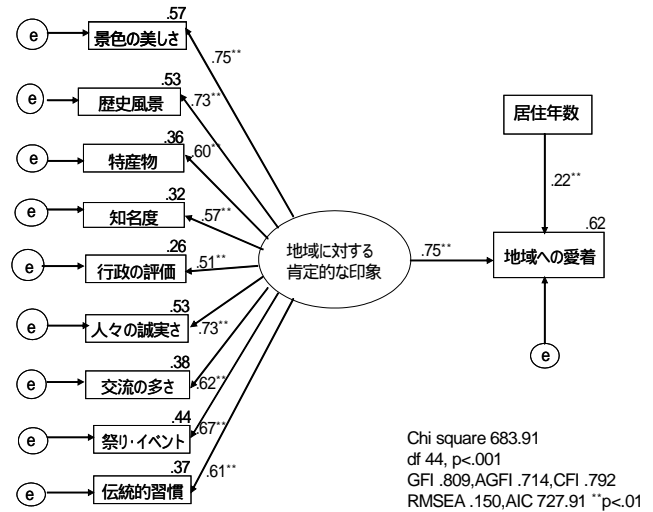


図-1 「地域に対する肯定的な印象」の潜在変数が地域愛着を形成するモデル

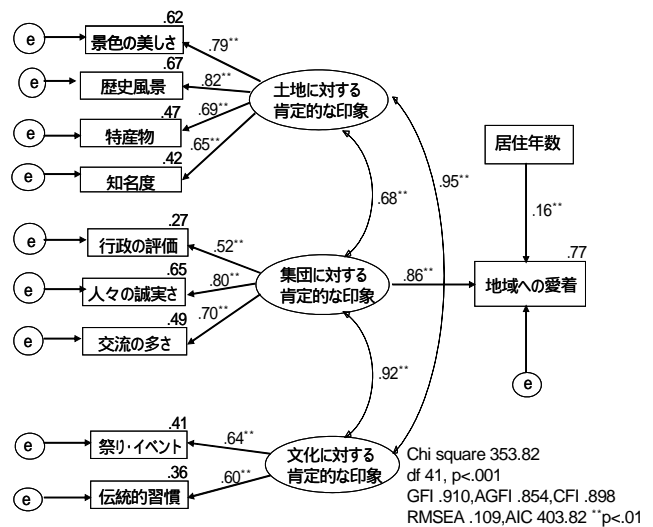


図-2 「3元モデル」

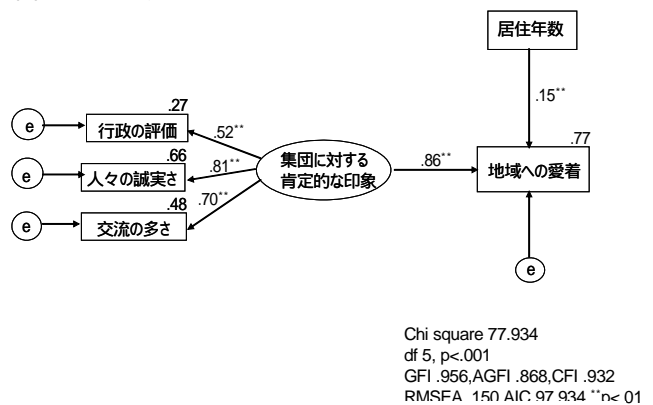


図-3 「集団に対する肯定的な印象」の潜在変数が愛着を形成するモデル

を「3元モデル」とよぶ。分析の結果は、3つの潜在変数の間に高い共分散が認められたが、「地域への愛着」形成を促すのは「集団に対する肯定的な印象」のみであった。この結果は、それぞれの「印象」は相互に影響を与え合い、「集団に関する肯定的な印象」が地域への愛着を規定することを示すと考えられる。従って、仮説3は支持された(図-2)。

また、「居住年数」から「地域への愛着」へのパス係数は標準化解で.16であった。これに対して「地域集団に対する肯定的な印象」から「地域への愛着」へのパス係数は標準化解で.86であったため、これらの間には大きな差があると言える。従って、地域への愛着形成には「居住年数」も多少の影響を与えるが、それ以上に「地域集団に対する肯定的な印象」の方が大きな影響を与えることが分かる。従って、仮説4は支持された。

5. 考察

(1)愛着形成の心理過程とその促進策

共分散構造分析の結果より、「地域に関する肯定的な認知」が「地域に対する肯定的な印象」を形成し、その印象が愛着を形成するモデル(図 1)よりも「3元モデル」の方が適合度が高かった(図 2)。これは市民の地域に対する印象が1つの次元にまとまらないことを示すものと思われる。しかし、「3元モデル」では、潜在変数間の共分散の係数が高かった。これらの結果から、集団に対して肯定的な印象を持っている人は土地や文化に対しても肯定的な印象を持っている傾向が存在するといえる。

「3元モデル」では「集団に対する肯定的な印象」のみが地域への愛着形成を促す効果を持っていた。この効果を確認するために、「集団に対する印象」が「地域への愛着」を形成するというモデルを作成し、分析した(図 3)。その結果、モデルの適合度は「3元モデル」よりも高く、集団に対する印象が地域への愛着形成に大きな影響を与えることを確認した(乖離度²=77.934, $p < .001$, GFI=.956, AGFI=.868, CFI=.932, RMSEA=.150, AIC=97.934)。これは、土地や文化に対する肯定的な印象は地域への愛着形成を直接的には促進せず、集団に対する印象を向上させ、間接的に愛着形成に結び付くことを示しているとみることができる。従って、地域への愛着形成の観点からは、美しい景観や人が集まる祭りなどは愛着形成において補助的な役割を果たし、地域の人々の誠実さや行政の評価、日頃の地域の人々とのふれあいが愛着形成に直接的な影響を与えられられる。地域への愛着形成を促すには景観整備やイベント・祭りなどを積極的に実行するとともに、道徳的な教育の強化、日々の行政評価の向上などに努める必要があると言える。

(2)居住年数と地域への愛着

分析結果より、「居住年数」から「地域への愛着」へのパス係数は.16であった。これに対して「集団に対する肯定的な印象」から「地域への愛着」へのパス係数は.86であった(図 - 2)。Brown et al³⁾らは、居住年数の

長さが地域への愛着形成に影響を与えることを述べているが、本研究の結果は「居住年数」が必ずしも愛着形成に大きな影響を与えないことを示している。

一般的に、居住年数が長ければそれに応じて地域の良い面にふれる機会も増加すると考えられる。そのため、共分散構造分析を行う際に、居住年数がそれぞれ「地域に対する肯定的な認識」に与える効果を検討したが、結果は有意なものではなかった。また、居住者の年齢も地域への愛着に関連があると言われるか³⁾、これについても共分散構造分析を行ったところ、有意な結果は得られなかった。すなわち、居住年数や年齢のような「時間の経過」は地域への愛着形成に大きな影響を与えないことが分かる。

これらの結果は、地域への愛着が時間の長さという「量」的なものよりも、誠実な市民とのふれあいや美しい景色の存在など、「質」的なものによって規定されることを意味すると考えられる。

6. 結果

本研究では、地域への愛着形成の心理過程を検討した。得られた知見を以下に示す。

- ・人々は地域に対する肯定的な認知から地域に対する肯定的な印象を形成し、その印象が愛着を形成することが分かった。
- ・地域愛着の形成のためには、地域住民の交流の促進、道徳的な教育、行政の評価の向上などによる「集団に対する肯定的な印象」を向上させることが最も重要であることが分かった。
- ・地域への愛着形成には居住年数よりも集団に対する肯定的な印象が大きな影響を与えることが分かった。

参考文献

- 1) 若林直子, 赤坂 剛, 小島 隆矢, 平手 小太郎:住民の防災意識の構造に関する研究 - その3 : 地域コミュニティとの関わりを表す項目を含む因果モデル -, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2000, pp.807-808
- 2) 二木 武 監訳:母と子のアタッチメント, 医歯薬出版株式会社, 2004
- 3) Brown, B., Perkins, D., Brown, G. : Place attachment in a revitalizing neighborhood : Individual and block levels of analysis, *Journal of Environmental Psychology*, 23, pp.259-271, 2003.
- 4) 横野光聰, 添田 昌志, 大野 隆造, : 地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2001, pp.769-770
- 5) Hidalgo, C., Hernandez, B. : Place attachment: Conceptual and empirical questions, *Journal of Environmental Psychology*, 21, pp.273-281, 2001.
- 6) 山本真理子, 外山みどり: 社会的認知, 誠信書房, 2001